

Ⅲ. 事業実績と成果の概要

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続） 「日英中トライリンガル育成のための高大接続」 平成 30 年度実績概要

補助事業の目的

本補助事業「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、文部科学省が指定したスーパーグローバルハイスクール（SGH）、SGH アソシエイト、あるいは、指定されなかったがグローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との有機的な高大接続を通して、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速することを目的としている。母語である日本語に加え、英語・中国語を操るトライリンガルになることは、「世界経済の中核を担っている英語圏・中国語圏に伍する日本社会の未来を築く」ため、そして、「地球上のより多くの人とコミュニケーションを通して世界の発展に寄与する」ために極めて有益であるという、本学のグローバル人材育成が拠って立つ認識を高校生にも普及し、高校生・大学生という立場を超えて、ともにグローバル人材を目指す若者が協力し合いながら意欲・能力を涵養しうる一貫した取組を推進していく。その過程で、「大学による高等学校への学修機会の提供」に加え、本学が学生の成長を促す支援の一環として推奨してきた「ピアサポート」すなわち「大学生（留学生を含む）による高校生への学修機会の提供」も意欲的に実施し、「上級生が主体的に下級生に範を示すことによって自らの人格・能力を磨く」というピアサポートの風土の醸成をより一層加速させていく。高校生・大学生、さらには高等学校・大学の教職員が一体となっ

た包括的高大接続を積極的に展開することにより、補助期間終了後も持続的かつ自立的に機能しうる体制の構築ならびにノウハウの集積を図る。

本学は、理事長・学長の強いリーダーシップのもと、「グローバル人材育成」ならびに地域社会の知的基盤となるべく「社会変革のエンジンとなる大学」「地域から世界へ進化する大学」を目指している。本補助事業は、高大接続の観点から、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成」という社会の要請に着実に応える教育的基盤の整備・運用の実質化を試みるものであり、将来的には日本における高大接続のモデルケースとなるべく成果を広く波及させることも目指していく。

補助事業の実績

（1）全体

平成 29 年度実施された中間評価において、本学の事業は「A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる」との評価を受けた。本事業採択後 5 年目となる平成 30 年度は、平成 28 年度井の頭キャンパス開設により本学の教育・研究機能が三鷹市に集約されたことを契機に、改善されたキャンパスの立地条件を活かし高大連携・高大接続を加速さ

せた。昨年度4月より開始したアドバンスト・プレイスメントを継続実施し、春学期・秋学期合計で事業取組学部である外国語学部の36科目だけでなく、医学部2科目、保健学部4科目、総合政策学部の14科目を含む56科目を対象科目として高校生に開放した。高校生履修者春学期0名となったので、急遽、夏季集中科目として保健学部4科目、総合政策学部1科目、外国語科目1科目を開講し、さらに英語キャンプ・中国語研修を加え、高校生履修登録者114名、高校生単位認定数123単位と目標を達成した。昨年度、桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結したが、修得した単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図るため、複数の大学に協定締結の働きかけをした。ライティングセンターの稼働を通じて学生の留学準備の補助機能を強化するとともに、各種学内イベントの高校生への開放や大学全体への事業の波及、それによる各学部教員と高等学校との連携機会の増加を通じて、大学の教育資源をさらに広範囲にわたって高校生に提供した。杏林APラウンドテーブルの継続的開催を通じ、本事業の取組に対する高等学校側からのフィードバックを得る機会を設け、教育効果の向上のための意見交換を定期的に実施した。学内では第三者評価委員会を開催することで、事業の目的・計画の妥当性や事業の進捗・達成状況の点検・評価を行い、課題を客観的な視点から分析し、各種事業の計画・実効性の改善を目指した。高校生への本学が有する教育資源の開放という観点から、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を実施し、さらに、各種教育イベントの提供という観点からは、高校生と大学生が共に学修する場である「IELTS対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」の継続実施に加え、昨年度に引き続き「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促した。高大接続改革の入試改革として、学力の3要素のうち「主体性を持ち多様な人々と協働し

つつ学習する態度」を多面的評価するために開発したルーブリックを、昨年度と同様に、平成31年度外国語学部AO入試Ⅱ期（グローバル型）で選抜方法の一部として使用した。

① 「アドバンスト・プレイスメント」を継続実施する

昨年度までに締結した大成高等学校、順天高等学校（SGH指定校）、神奈川総合高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、武蔵村山高等学校、調布南高等学校、府中東高等学校、藤村女子高等学校の9高等学校と「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を継続維持し、学則・規定等を整え、医学部2科目、保健学部4科目、総合政策学部14科目、外国語学部36科目の春学期・秋学期合計56科目を対象科目としてアドバンスト・プレイスメントを継続実施した。

春学期開講科目の受講を希望する高校生履修登録者が0名となったため、急遽、夏季集中科目の開講を年度内に決定し、保健学部4科目（基礎生物学・基礎化学・基礎物理学・基礎数学）、総合政策学部1科目（近現代史と現代社会）、外国語学部1科目（目的別英語演習）を開講したところ、計114名の高校生が履修し、123単位がアドバンスト・プレイスメントとして認定された。

3月に実施された日英中トライリンガルキャンプには高校生29名が参加し、口語中国語の科目として29単位をアドバンスト・プレイスメントで認定した。本年度中にアドバンスト・プレイスメントで単位認定を受けた高校生は合計128名、認定された単位数は152単位となり、目標値50名、100単位を上回る結果となった。

桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図っており、本年度は複

数の大学に働きかけを行っているが、先方の大学から正式な協定締結の回答を待っている状況である。

② 「ライティングセンター」の運営

井の頭キャンパス移転と同時に移設したライティングセンターが本年度も継続的に稼働し、ジェイソン・サマービル特任講師によるワークショップで訓練を受けた大学生9名がピアチューターとして、大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートする体制が整った。

ライティングセンターと授業の連動に関して、平成27年度より継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目を選定し、科目担当者に授業の中でライティングセンターの積極的利用を学生に奨励することと、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。

平成30年6月9日、高校生対象英検対策ライティングセミナーが開催され、2名の高校生が参加した。

本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターで開催され、6月16日に12名、7月28日は18名、8月4日は6名、8月18日は14名、8月19日は7名の合計57名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。

平成30年7月13日、実用英語Iの授業内で、ライティングセンター特任講師が英文ライティング・ワークショップを開催し、杏林大学生87名が受講した。

平成30年10月23日・30日の英語作文の授業内で、ライティングセンター特任講師が英文パラグラフ構造に関する指導を行い、合計68名の杏林大学生が受講した。

平成30年11月17日に高校生対象のライティングセミナーが開催され、6名の高校生が特任講師や大学生ピアチューターの指導を受けた。

平成30年11月21日、11月28日、12月5日の3週にわたり「プレゼンスキル・ワークショップ」

が開催され、延べ3名の大学生がBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に取り組んだ。

平成31年3月7日、保健学部主催南カリフォルニア大学研修の事前研修として、プレゼンスキル・ワークショップが開催され、14名の研修参加予定の学生が参加した。

平成30年9月～平成31年3月、平成31年度のピアチューターの募集を開始し、書類審査ならびに面接を行って、候補者を決定した。内定した候補者はライティングセンターの活動を見学した。

③ 学内外への事業の周知

平成30年4月～平成31年3月、特設サイトを通じて、杏林APラウンドテーブルなどの大学と高等学校の会合、ライティングセンターの活動や、高校生にも開放した「英語キャンプ」、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「中国語カラオケ・吹替大会」、「IELTS対策講座」などの教育的イベント、高等学校教員と大学教員の教育に関する情報交換を目的とした「高校と大学をつなぐFD/SD」、高校生と大学生の交流・協働学修をテーマとした「日英中トライリンガルキャンプ」などの活動について、継続的に発信を行った。

平成30年4月～平成31年3月、医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義についても継続的に発信し、大学全体としての取組の実績を強調した。

④ 「杏林APラウンドテーブル」の継続実施

平成30年5月21日、第12回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学

園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校、藤村女子高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、都立調布南高等学校、都立府中東高等学校、都立杉並総合高等学校の13校18名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

平成30年11月19日、第13回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校、藤村女子高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、工学院大学附属高等学校、都立調布南高等学校、都立府中東高等学校、都立杉並総合高等学校、神奈川県立横浜清陵高等学校の15校22名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。

⑤ 「グローバルループリック」の活用

平成30年5月、学力の3要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力（話す力（対話力+プレゼンテーション力）、聞く力、書く力、読む力）」に関するループリックを作成し、HP上で公開。同時に、平成31年度外国語学部AO入試第Ⅱ期（グローバル型）でループリック・小論文による事前資格審査、ループリックに基づくプレゼンテーションを含む面接によって選考を行うことを公表。

(2) 教育

⑥ 高大連携イベントの開催

平成30年10月13日、工学院大学附属高等学校において、外国語学部教員がグローバルAPセミナーとして講演。高校生44名と高校教員2名が参加。

平成30年10月13日、工学院大学附属高等学校において、保健学部教員がグローバルAPセミナーとして講演。タイトルは、「映画で学ぶ診療放射線技師の世界『ハリーポッターと賢者の石』より」で、高校生32名、高校教員2名が参加。

順天高等学校主催のグローバルウィークにおいて、10月31日はライティングセンター特任講師と総合政策学部教員が、11月1日は国際交流センター長が講演を行い、それぞれ高校生26名、13名、12名、計51名、高校教員4名、4名、4名、計12名が参加した。

平成30年6月9日、高校生対象英検対策ライティングセミナーが開催され、2名の高校生が参加した。

本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターで開催され、6月16日に12名、7月28日は18名、8月4日は6名、8月18日は14名、8月19日は7名の合計57名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。

平成30年7月13日、実用英語Ⅰの授業内で、ライティングセンター特任講師が英文ライティング・ワークショップを開催し、杏林大学生87名が受講した。

平成30年11月17日に高校生対象のライティングセミナーが開催され、6名の高校生が特任講師や大学生ピアチューターの指導を受けた。

平成30年11月21日、11月28日、12月5日の3週にわたり「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催され、延べ3名の大学生がBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼン

テーションの技術の向上に取り組んだ。

平成31年3月7日、保健学部主催南カリフォルニア大学研修の事前研修として、プレゼンスキル・ワークショップが開催され、14名の研修参加予定の学生が参加した。

平成30年10月6日に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生6名、大学生6名を含む25名が参加、「中国語カラオケ・同時通訳パフォーマンス大会」には大学生34名、留学生8名を含む90名が参加。

平成31年3月23日・24日の日英中トライリンガルキャンプで行われた「プレゼンテーションコンテスト」には、高校生29名、大学生11名が参加。

⑦ 「教務的制度」の構築

大学教養レベル・グローバル関連夏季集中科目を本年度は下記4科目を高校生に開放。総計で高校生14名、大学生70名が履修した。

平成30年8月20日・21日、科目A「口語中国語（外国語学部）」参加高校生3名、在学生40名。

平成30年8月22日・23日、科目B「英語をとりまく多彩な学問（外国語学部）」参加高校生8名、在学生26名。

平成30年8月24日・25日・科目C「英語と日本語でまなぶ「社会のしくみ」入門（総合政策学部）」参加高校生1名、在学生3名。

平成30年8月27日、科目D「感染症を巡る諸問題とその対策（保健学部）」参加高校生2名、在学生1名。

平成30年4月～平成31年3月、グローバル関連科目37科目、COC関連科目12科目を開講し、それぞれ、延べで2,838人、1,051人の在学学生受講者があった。

⑧ 「アドバンスト・プレイスメント」実施に向けた検討

平成29年3月に桜美林大学、5月に共愛学園前橋国際大学、9月に創価大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、以後この連携4大学でアドバンスト・プレイスメントの単位互換を実施していくことになった。平成30年度も複数の大学に働きかけを継続して行っており、武蔵野大学から問い合わせがあった。

⑨ 「学修機会」の提供

平成30年8月6日、7日、杏林大学井の頭キャンパスにおいて英語キャンプを実施。22名の大学生と11名の高校生が参加し、英語の集中訓練が行われた。

平成31年3月23日、24日の1泊2日で、「日英中トライリンガルキャンプ」を多摩永山情報教育センターで実施。本学在学学生11名（チューターとして参加、うち1名は留学生）、本学教職員9名、高校生29名が参加して、大学生や中国からの留学生とともに協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

⑩ 「教員研修」の実施

平成30年7月25日、「第5回 高校と大学をつなぐFD/SD」を杏林大学井の頭キャンパスで開催した。講師は、早稲田大学入学センター副センター長、入試開発オフィス長沖清豪教授で、演題は「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」で、高校

教員 3 名、杏林大学教職員 84 名が参加。

(3) 事業の評価

⑪ 自己点検・第三者評価委員会

平成 30 年 9 月 29 日、杏林大学井の頭キャンパスにおいて、3 人の外部評価委員として、中学・高等学校の校長（高校教育全般）、大学教授（英語関係）、高校教諭（中国語関係）を招いて大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ（高大接続）の第三者評価委員会を開催した。

平成 29 年 9 月、AP 推進委員会にて第三者評価書が共有され、外部評価委員より受けた指摘や批判に基づき、具体的な改善案の検討が行われた。

とができるようになった。さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。

・春学期・秋学期の正規開講科目をアドバンスト・プレイスメントの対象科目として開放しているが、高校生の高等学校での授業時間割の自由度が低く、通常科目を履修しづらい状況にあることが判明したため、夏季集中科目を 8 月 13 日から 30 日の間に開講したところ、114 名の履修登録がされ、99 名が単位認定された。また、春季休業中 3 月 23 日・24 日に実施されたトライリンガルキャンプに参加した 29 名も単位認定を受けた。

・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の 3 大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。

補助事業における具体的な成果

(1) 全体

① 「アドバンスト・プレイスメント」を継続実施する

・全学的アドバンスト・プレイスメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけでなく、大学進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものにするこ

② 「ライティングセンター」の運営

・特任講師ならびにピアチューターから個別の指導を受けることで、訪問した学生は英語における自身の長所と短所を見極めることができ、英語ライティング学習に対するより積極的な姿勢が生まれた。

・ライティングセンターのスタッフと英語授業を担当する教員たちの中で協力、調整が行われたことで、指導を受けた学生は英語授業とライティングセンターの活動が相補的であるという認識を強くし、英語ライティング向上に向けてさらに意欲を高めることとなった。また、継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪問した学生数・実施した個人チューターセッション回数ともに、センターの稼働率を高水準で維持することに成功した。

・ライティングセンターの在学生利用者数は年間 432 名にのぼり、実質稼働月数 7 か月として月平均

62名が利用した。高校生利用者数は年間81名にのぼり、目標値の30名を大きく上回った。

・特任講師・大学生ピアチューターによる「英語ライティング・ワークショップ」「ライティングセミナー」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。

・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。

・「ライティングセミナー」では、参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

・グローバル人材育成が外国語学部だけではなく全学的に波及し、海外研修や留学に参加する学生が保健学部・医学部・総合政策学部でも増加してきている。ライティングセンターで海外研修や留学の事前研修を受けることによって、留学先での学習にスムーズに入れるようにすることで、グローバル人材育成を加速させることができた。

・平成31年度に向けて早期より次年度ピアチューターの募集、採用活動を行ったことで、次年度への引継ぎがスムーズとなり、平成30年度の活動を停滞させることなくそのまま維持することが可能となる。

③ 学内外への事業の周知

・平成30年7月25日に実施した「第5回高校と大学をつなぐFD/SD」では、早稲田大学入学センター副センター長、入試開発オフィス長の沖清豪教授が、「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」という演題で講演し、高校教員3名、杏林大学教職員84名が参加した。

・平成30年8月6日・7日に夏季休暇を活用して実施した「英語キャンプ」では、22名の大学生と11名の高校生、1名の聴講生の合計34名が参加し、大学生と高校生が英語の集中特訓に取り組んだ。

・8月の夏季休暇を活用して実施した「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」では、昨年度は3科目であったが今年度は保健学部の1科目を加え4科目開講された。合計14名の高校生が参加し、合計70名の大学生に交じって受講した。さらには、高校生を対象とした夏季集中アドバンスト・プレイスメント科目として5科目追加開講し、86名の高校生が受講した。

・平成30年10月6日に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生6名、大学生6名を含む25名が参加、「中国語カラオケ・同時通訳パフォーマンス大会」には大学生34名、留学生8名を含む90名が参加し、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

・平成31年2月9日・16日に2週連続で実施した「IELTS対策講座」では、3名の杏林大学生に高校生11名が加わり、留学に向けて高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

・平成31年3月23日・24日に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では合計29名の高校生が参加し、英語や中国語を通じた留学生との交流、

及び、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組み、その成果をコンテスト形式でプレゼンテーションする学修に取り組んだ。

・総合政策学部、外国語学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学科看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、国際交流センター長の関東国際高等学校での海外研修報告会への参加など、全学的に個別教員と高等学校との連携が継続的に行われており、大学の持つ教育資源をより広範囲にわたって高校側に提供することができている。

④ 「杏林 AP ラウンドテーブル」の継続実施

・第12回杏林 AP ラウンドテーブルにおいては、アドバンスト・プレイズメントの高校生・保護者向けの説明会を開けば参加者も増えるのではないかとの示唆を受け、各種の学修イベントとセットでPRに力を入れていくことを確認した。また、APの科目数が多いことが良いのか、高校生がほんとに参加したくなるような少数の科目に絞って多くの高校生を集めることでも良いのではないかとの意見があり、次年度の科目選定に配慮することになった。さらに、夏季集中講座などに参加した高校生の学修評価をしてもらえるのかとの質問があり、今後、高等学校の調査書（ポートフォリオ）が変わり、こうした校外学習などを自己申告して記載していけるようになるにあたり、評価がしっかりしていることが重要となることを踏まえ、高校生に単位を与える学習機会に関しては、大学生と同基準で評価することを確認した。

・第13回杏林 AP ラウンドテーブルにおいては、高大接続・入試改革に対する高校側の対応についての情報を得た。英語4技能の強化や、英検、TEAP、GTEC、ケンブリッジ英検、TOIEC、IELTSなどの受検を課している。ポートフォリオ対応として、多くの高等学校でClassiを導入また

は検討している。アクティブラーニングを積極的に行い、50分授業の内、教員が話をするのは20分以下にしようと試みている。新学習指導要領の研究・研修を学校全体として行おうとしているが、教員間の温度差がある。学力観が変わる中で、どのような人材を育ててゆくのかという根本を教員が共有してゆくことが重要である。探究的学習や課題研究については、総合高校のほうに実績があるが、杏林大学を含め大学での実験などを活用している。ただ、若い教員の中には、自身の卒論経験がない人もいて、指導が困難になる場合もある。調査書やポートフォリオの入試での大学側の活用の方針が良く見えないのは問題である。共通テストを受ける一般入試より、現在の指定校推薦、公募推薦、AOで受験する生徒が多いので、多様な進路選択をする生徒に対して入試改革に対応するのが大変である、などの貴重な情報を得た。さらに、「大学のアドミッションポリシーが出てこないのが問題で、アドミッションオフィサーを置く個別の良い生徒を探してゆく入試に移行する気配がない」との指摘に対し本学学長は、「アドミッションポリシーは既にどの大学でも出しているが短い。杏林大学では高大接続の観点から、きめ細かい長い文章で書いており、状況に応じて修正もしている」と回答した。

⑤ 「グローバルルーブリック」の活用

・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができるとは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が

実施された。

・導入2年目であり、選考日を12月15日にした影響からか、外国語学部全体の募集人員10名に対し、志願者15名、合格者6名という結果となった。

(2) 教育

⑥ 高大連携イベントの開催

・工学院大学附属高等学校における外国語学部教員によるグローバルAPセミナーでは、日常的にオールイングリッシュで授業を受けている高校1年生を対象に、社会言語学・コミュニケーション論の研究成果をもとに、よりプラクティカルな英語学習、そして「語彙と文法の隙間」を取り持つ「コミュニケーションの作法」のような視点から継続的で効果的な英語学習のコツを提供し、グローバル人材育成につながることができた。

・工学院大学附属高等学校における保健学部教員によるグローバルAPセミナーでは、「ハリーポッター」シリーズに登場するケガのシーンを題材に、エックス線撮影をはじめとした画像検査、ケガの原理や骨に関する雑学など専門的な話を含めて解説し、受傷機転（ケガのきっかけ）からの結果考察や、患者の年齢や性別による違いについて高校生が考える機会となった。

・順天高等学校主催のグローバルウィークは、先方がSGH、本学がAPで採択されて以来、全面協力して開催される行事であるが、今年度も本学から3名の教員を派遣してグローバル人材育成を支援することができた。ライティングセンター特任講師は「Student interaction in English using smartphone apps」、総合政策学部教員は「Is technology killing (traditional) culture?」、国際交流センター長は「Gulliver in Japan」というテーマで講演を行い、高等教育における教育機会を提供することができた。

・特任講師・大学生ピアチューターによる「英語

ライティング・ワークショップ」「ライティングセミナー」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。

・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。

・「ライティングセミナー」では、参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

・特任講師による「英語ライティング・ワークショップ」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。

・「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス大会」では、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。

・日英中トライリンガルキャンプにおける「プレゼンテーションコンテスト」では、「チャイナインバージョン」というテーマのもと、1つのプレゼンを日英中の3言語で構成するという課題に取り組み、3言語の有用性を確認する機会となった。

⑦ 「教務的制度」の構築

・「口語中国語」では、中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は3クラスに分かれて会話表現や中国語検定対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には中国人留学生が加わり、発音指導や異文化交流を楽しみながら会話練習などを行った。

・「英語を取り巻く多彩な学問」では、外国語学部に所属する8人の教員から、英語の歴史や英日の発音アクセントの違い、翻訳実務の内幕、英語と観光の関係、さらにはアニメ映画の字幕の工夫にいたるまで、多岐にわたる講義を受講し大学での多彩な学問領域に触れる機会を得た。

・「英語と日本語で学ぶ「社会のしくみ」入門」では、社会科学系の学問への入門として、英語と日本語を通して、グローバルに見る視点の素地を身に着ける機会となった。

・「感染症をめぐる諸問題とその対策」では、地球規模で重要となる感染症について、高校生が在學生と共に学び、視野が広がる有意義な学修となった。

・多くの在學生がグローバル関連科目やCOC関連科目で学修することによって、杏林大学の目指すグローバル人材育成と地域指向の双方の視点から、さまざまな学修内容を多角的に学ぶ機会となった。

⑧ 「アドバンスト・プレイズメント」実施に向けた検討

・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイズメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度と

なった。

⑨ 学修機会の提供

・「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。

・「日英中トライリンガルキャンプ」では、高校生29名に加え、留学生1名を含む大学生11名が参加し、「チャイナイノベーション」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事した。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、中国の近年の発展を中国留学経験者である大学生が紹介し、「キャッシュレス事情」、「デリバリー」、「ネットショッピング」、「タクシーの配車アプリ」、「交通事情」というテーマについてグループワークを行った。2日目にはコンテスト形式で、グループワークの成果を、日本語、英語、中国語の3か国語を用いてプレゼンテーションを行った。トライリンガルになること、留学経験を積み異文化体験することの重要性を、高校生、大学生が共に学ぶ良い機会となった。

⑩ 「教員研修」の実施

・入試改革での選抜制度の変更は、大学から高校へのメッセージであり、学力の3要素を測る方法、英語4技能（民間試験）の導入、基礎学力テストと大学入学共通テストの利用方法、調査書変更やe-Portfolio導入による高校教員の負担などなど、数々の具体的論点について解説が行われた。

・学生の変容からみれば、M.トロウのエリート型学生、マス型学生、ユニバーサル型学生の3分類は、学生像の変化を言い当てており、それに対応し

て、国立大・高選抜性私大、中選抜性私大、低選抜性私大のそれぞれにおいて、基礎学力テストや大学入学共通テストの利用方法と科目数などを各大学が決めてゆくことになる」と説明があった。CEFRに基づく英語4技能試験は到達度を見る試験となり選抜には使えず、実質的には4教科による選抜と英語4技能の到達度で評価することになると指摘。また、学力の3要素を評価するために、学力担保型のAO入試が中堅大学では求められていくとの説明があり、今後の本学の入試改革に対して全学の教員が考える貴重な機会となった。

(3) 事業の評価

⑪ 自己点検・第三者評価委員会

・高大接続の意義は、入試改革と高等学校・大学の三位一体の改革とされているが、その理由や目的がはっきりしていない部分もあり、小・中・(高)の教育が先行して変わる中で、入試と大学が変わらなければならないという理解をしている。今では知識はPCとネットで簡単に手に入れることができるので、情報の応用・分析や創造性の育成が大学に課された教育課題であろうとの指摘を受けた。

・平成29年度では、AP（アドバンスト・プレイスメント）の実施とループリックの入試での活用が大きな成果である。また、中間評価でA評価を受けた点も評価できる。その過程で杏林APラウンドテーブルや大学との連携もでき、組織的な展開がみられている。今後1年半の事業のさらなる展開が期待できるが、補助期間終了後の継続も視野に入れてほしいとの評価を受け、指摘された課題について今後検討していく良い機会となった。